



本田宗一郎顕彰会

会 報
第 3 号

平成19年3月

Honda Soichiro Society



本田宗一郎顕彰会会長
大橋 武司

本田宗一郎生誕百年記念事業を終えて

昨年五月、前会長の浅野保さんが急逝されたことは誠に残念でなりません。これまでの本会ならびに教育界におけるご功績に対し深く感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。

浅野会長のご逝去を受けて、急遽私に後任に就くよう依頼されましたが、自分は会長という器ではなく、大変に困惑しました。しかし「どうしても」ということで、不安を抱えながらも引き受けることとなりました。

就任するに当たって、目前に迫った「本田宗一郎生誕百年記念事業」を成功させることが責務であると考え、顕彰会の役員、記念事業実行委員会、ポンポンクラブ、役所の皆様等、多くの方々のお力添えを得て「記念式典」「遺品展」「記念祭」の三つの事業に取り組みこととしました。

事業展開については必要な資金が十分ではないので、多方面に亘っての協賛をお願いしてきました。幸いホンダ関連の企業、地元の実業所、個人の皆様等々から多くのご支援ご協力を賜り、盛会裡に事業を終えることができ感謝しております。

本顕彰会は郷土の偉人本田宗一郎さんの業績を讃えるとともに、その考え、精神、哲学を多くの青少年に伝えていくことやこの地に根ざすものづくりの精神を伝承していくことが大切な使命であると考えます。この平成十九年度には天竜市時代から待望の「本田宗一郎記念ものづくり伝承館」（仮称）が建設されることとなっています。今後はこの拠点を中心に会員の皆様共々本顕彰会の活動を進めていきたいと考えます。



天竜川下流方向から 本田宗一郎さんの故郷 旧天竜市を望む

本田宗一郎生誕百年記念事業 in 天竜

本田宗一郎顕彰会事務局長

鈴木 益雄

本田宗一郎氏の生誕百年を記念し、氏の偉業を讃え、その精神を学び広める目的で開催した記念事業は、浜松市、本田家、本田技研工業（株）並びにその関連企業や団体、地元関係者など、多くの方々に支えられて成功裡に幕を閉じた。来場された皆様に心から感謝申し上げます。

本事業は、記念式典、遺品展、記念祭の三本を柱に、実行委員会を設けて行った。

記念式典

十一月十二日 於壬生ホール

（主管 本田宗一郎生誕百年記念事業実行委員会）

【式典】

満席の会場に溢れんばかりのハッピーバースデーの大合唱で幕を開けた。本田宗一郎の一生を紹介する映像、母校光明小のドリーム委員会の児童らの感謝のメッセージ、物作りと夢を追い続けた宗一郎への憧れが伝わってくるファンファーレであった。

式典は、大橋実行委員長、北脇浜松市長の挨拶、寺田浜松市議会議長、片山さつき衆議院議

員、中谷県議

会議員の祝辞、

本田さち様の

ご臨席を得て、

会場は和やかな

雰囲気につ

つまれた。



▲開会式

【表彰式】

本田宗一郎伝記読書感想文、似顔絵、オートバイ絵コンテストには多数の応募があった。最優秀賞五名、優秀賞十五名、佳作二十九名に賞状を授与した。受賞者を代表して、清滝中の村井萌乃さんが、読書感想文を朗読した。

【記念公演】

伝統芸能とコンテンポラリーダンス。ミュージカル「SOICHIRO 物語」を上演。宗一郎少年と彼を取り巻く子供たち、数々のエピソードを演ずる子らの健気さが観客を魅了。拍手が鳴り止まなかった。



▲コンテンポラリーダンス

【アシモショー】

野外ステージで三回行い、八百人余がASIMOと対面。ロボットとは思えない人間的な行動に、子供たちは大歓声。このショーには本田技研工業（株）のご支援を頂いた。



▲アシモショー



▲ミュージカル「SOICHIRO 物語」

遺品展

十一月十一日～十九日 於秋野不矩美術館

(主管 本田宗一郎顕彰会)

秋野不矩美術館で行った遺品展は、本田家から旧天竜市に寄贈された、本田宗一郎と父儀平の遺品千点の中から、宗一郎のルーツ、偉業、趣味に関する百六十点、本田家から、勲一等旭日大授賞等勲章五点、絵画六点をお借りし展示した。

初日には、本田さち夫人も会場を訪れ、展示遺品にまつわるエピソードをお聞かせいただいた。

期間中の来館者は、二千五百九十七人で、その範囲は関東、関西まで及んだ。



▲遺品展

記念祭

十一月四日～二十六日 於壬生ホール

(主管 ポンポンCLUB)

記念祭は壬生ホールをメイン会場として行った。

十一月十二日に記念祭のセレモニーが盛大に行われ、天竜林業高校の若杉太鼓や谷口尚己ライダールの走行披露に、会場は沸き返った。会場では、子供の物作り体験教室、自慢のポンポン大集合など、ポンポンクラブならではの催しで、終日賑わった。十八日には「おやじさんを語る」と題して、マン島TTレース出場ライダーや関係者によるトークショーを行った。

展示コーナーでは期間中、F1レーサーマシンのほか、オートバイの名車、本田さんを偲ぶ写真、バイク絵、似顔絵コンテストの写真を展示した。本記念祭に先駆け、宗一郎縁の地に、案内看板を設置した。



▲若杉太鼓 (天竜林業高校)

記念事業を終えて、改めて本田宗一郎氏の人間味溢れる人柄と、没後十六年を経てなお、私共に夢を与え、輝き続ける偉大さに心ひかれる。この事業を機に「夢」を追い続けた宗一郎の精神が、故郷「天竜」の地に根付くことを願う。



▲カーチス号走行披露

▼オートバイ展 (ポンポンCLUB)



本田宗一郎生誕百年記念事業に参加して

本田宗一郎生誕百年祭によせて

東京 本田 さち

昨年十一月十七日に、亡夫宗一郎は、生誕百年を迎えました。早いもので、主人がこの世を去りましてから、十五年半の歳月が流れました。できることならば、元気な主人と皆様でこの百年祭を迎えることができたらどんなに良かったかと、詮無いことながら心から思っております。

去る十一月十二日、私は浜松市のお招きを受けて、主人の生まれ故郷天竜を久しぶりに訪れました。その折、かねてからの念願であった天竜浜名湖鉄道に揺られて、車窓の景色を懐かしくまた新鮮な気持ちで眺めながら、天竜二俣駅に降り立ちました。町には生誕の地の赤いのぼりが、あちらこちらにはためき、主人の生誕百年を祝い、歓迎してくださっていました。その後、顕彰会主催の「遺品展」を見学させていただきました。

翌日は、前夜の浜名湖の宿から、車で記念式典と記念祭会場の天竜壬生ホールへむかいました。会場に到着すると、そこには寒風の中、地元の方々はもちろん各地方から集まってくださった方々やバイクが溢れかえっていました。記念祭では懐かしい方々、ご家族連れの方、若い方からご高齢の方まで、数多くの皆さんとお会いすることができました。特にお身体が不自由にもかかわらず車椅子で来てくださった男性の方には本当に感動いたしました。午後か

ら始まった式典でも、素晴らしい読書感想文の朗読や、それに美しい天竜の自然を見事に表現したダンスや音楽に感銘いたしました。中でもミュージカル「SOICHIRO物語」は私の想像をはるかに超える素晴らしい公演でした。出演者の皆様が勉強やお仕事の合間をぬって、ここまで感動のミュージカルを完成してくださったことに賞賛と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

最後に主催の浜松市、本田宗一郎顕彰会、ポンポン CLUBの皆様、またご参加くださった市民の皆様が、主人のためにこのように素晴らしい生誕百年祭を企画、開催、ご参加くださったことに、なき主人に代わりまして、心から厚くお礼申し上げます。改めて、主人は本当に幸せ者だと痛感いたしました。二〇〇八年には、主人を記念して「ものづくり伝承館」が完成されるかと伺っております。浜松市、顕彰会の皆様にはまた引き続きお世話になります。どうぞよろしく願いましたします。私もその完成の折には、再び天竜の地を訪れて、皆



▲遺品展にて

様とお会いできることを心から願っております。

私にとって久しぶりの小旅行でしたが、生涯忘れられない思い出のたくさん詰まった素晴らしい旅となりました。本当に皆様ありがとうございました。



▲天竜浜名湖鉄道 天竜二俣駅前

生誕百年事業に感謝

磐田市大原 磯部 徳蔵

本田宗一郎生誕百年事業のイベントにご招待をさせていただき、久しぶりに姉（本田さち）と同席でき、楽しいひと時を過ごすことができました。

今までも、旧天竜市では義兄、本田宗一郎のことにつきましては、いろいろと行事等していただき幸せな人だと思えます。心から感謝申し上げます。

さてイベントの事ですが、広場一杯にホンダの製品が展示されポンポンクラブの（代表宮地様）皆様のご苦勞が本当に大変だったと思います。今までにも、随分色々な行事をしていただきその都度お便りを頂き紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

児童のミュージカルについては、感動の一言に尽

本田宗一郎生誕百年記念事業に寄せて

本田宗一郎顕彰会 相談役 大石 伝次

かつての天竜川にダムは無く、澄んだ多量の水が滔々と流れていた。その豊かな流れに乗って多くの筏が下り、久根鉾山の鉾石舟が上下した。帰りの鉾石舟が、白い帆に風をはらませて、流れを溯る風景は一幅の名画であった。本田少年は船明から、度々この筏に乗せてもらって、二俣に使いしたと言う。こうして豊かな自然の中でやしなわれた感性は仕事や趣味に生かされている。天竜の流れが、テームズ川や金門橋に通じているとは、意識していなかったであろうが、この流れの先に何かがあると夢みていたに違いない。

記念式典第三部公演の、コンテンツポラリーダンスは、本田少年を育てた天竜の流れと、その水の運動を表現したものと思われる。岩を咬む激流、その流れが涸となり、瀬となり渦を巻き、岩にぶつかってしぶきとなる。その躍動を踊り手の体の動き、手の動きで表現し力強い打楽器の音と共に、本田氏の波乱の人生を象徴して、観客の心をゆさぶった。そして感動は、ミュージカル「SOICHIRO物語」につながったのである。

舞台上に紺緋の子供達が並んだ。素朴な演技に独特な透明感があり、元気でのびのびしている

のがよい。本田少年が昼食を早くするために清瀧寺の鐘を突いたこと。通信簿の保護者印を自転車に古タイヤで作った、本田は左右対称だからよかったが、友達に作ってやったのはバレーで先生に叱られる。自転車で浜松まで行って、飛行機を松に上って見る。本田少年の腕白ぶりが表現され、高等科二年を卒業して、東京のアート商會に出発するところで終る。ファイナレは子供達全員「やらまいか」の合唱と踊りに、少女達の踊りが加わり、本田少年の勇み立つ心を表現し、観客を魅了して終った。年を越した今も、この「ミュージカル」が昼夜二回の公演だけで終るのは惜しいとの声が聞かれる。

ロボット「アシモ」の実演。F1・自転車オートバイ・ドリーム号の外、いろいろなオートバイの展示。美術館では趣味の絵画・数々の賞状・勲章等が見られた。本田氏は一代にして世界的自動車産業を育てあげたのであるが、少年時代光明村にて、当時未だ珍しかった、自動車の出すガソリンや油の匂いに感動したことが原点だと思われる。

今回の記念事業は実行委員の外、多くの方々によって、企画運営され見事な出来栄であった。ご高齢にもかかわらず、遠路ご出席下さった



▲子どもと「ものづくり」

さち夫人も大変喜ばれたようである。本田氏の偉業を伝え、子供達に物作りの大切さ面白さを教える記念館の完成が待たれます。

遺品展で思い残すこと

本田宗一郎顕彰会理事 市川 憲二

本田宗一郎生誕百年を記念して開催した遺品展は、古里として本田宗一郎さんの偉大な業績と人間性を後世に語り伝えていくことの必要性を教えてくれた意義深い事業であったと評価を得ている。

私は、顕彰会の役員として初日(十一日)の午後、受付・館内の巡回等に従事し貴重な体験をした。展示された数々の遺品の前で、本田さんを偲びながら思い出を語り合っていることを見聞きしながらこれまでとは違った人間本田宗一郎さんをかいま見ることができた。

その一方で、「これがなぜここにあるのか不思議」と、驚いていた人から、その理由を聞くことができなかったことを後悔している。

それは、三時頃だったと思われるが、出口に近いところに記念品として展示してあった金属製の遺品(本



▲遺品展会場

田技研OBの梶村理事は、「レース用エンジンピストン」ではないかと見ている。」をなつかしそうに見詰めながら「これがどうしてここにあるのか不思議だなあ・・・」、「本田さんの設計図どおり作ったのに、使い物にならないということは何回も作り直した・・・」というようなことをつぶやきながら写真を撮っていた。ここにあるのが不思議という理由と、いつ頃作ったのか、聞いてみたいと思ったが、夢中で撮影しているため質問できずにいた。そのとき入館者が多く受付が込み合っていたので、その場を離れ一段落したところで戻ってみると、その方の姿が見えずお帰りになった後だった。残念無念「後悔先に立たず」と嘆いているとき、会報の寄稿依頼があったので、これを利用させていただくことにした。あの遺品について心当たりがある方は、是非とも顕彰会事務局（〇五三一九二五―六一二二）または「天竜地域自治センター地域振興課」（〇五三一九二二―〇〇一三）までご連絡下さい。本田宗一郎さんの偉業を次の百年へ向けて引き継いでいくための貴重な遺品の一つではないかと考えられるので、是非ご協力いただきたいと願っている。



▲本文中の遺品

ポンポンCLUBと生誕百年祭

ポンポンCLUB 伊熊 廣至

やって来ました、本田宗一郎さん生誕百年記念祭。思い起こせば二〇〇二年二月、旧天竜市内のショッピングセンターで懐かしのポンポンを展示、訪れたバイクファンに喜ばれました。このままでは終われない。やらまいか精神で、その年六月に本田さんの生誕百年記念祭をやるうと準備委員会を設立。

その後親子でバイクの分解・組み立ての体験会・ポンポン大集合IN天竜と銘打って自慢のバイクで参集し、バイク談義に花を咲かせました。天竜市内の本田さんゆかりの地を散策ポイントとしたコースを設定して、ウォーキングも実践してきました。古いバイクの復元作業も続けています。

本番に備えプレイベントを四年ほど実施してきました。二〇〇六年十一月四日、本田宗一郎生誕百年祭が始まりました。ポンポンCLUBの関係スタッフもうごきました。十二日のポンポン大集合IN天竜では百七十台もの自慢のバイクが強風の中でも参集してくれました。嬉しいかぎりです。本田さんはそこにはいませんが、きつとライダーの皆さんの心の中で語りかけたでしょう。イギリスのマン島TTレースで活躍された谷口尚己さんも横浜

から駆けつけてくれ、走る姿を披露。ライダーの皆さんとミーティング、バイクやレース談義で寒さも吹き飛んだでしょう。

写真展示は本田宗一郎さんの軌跡展を、似顔絵・バイク絵展では保育園、幼稚園の園児、小学生の皆さんから本田さんの似顔絵をしてバイクの絵をたくさん出してくれて、会場を盛り上げました。ダンボールASIMOでは親子で工作を楽しんだ。本田さちさんがお元気な姿でお見えになり展示品をしっかりとご覧になりました。生誕百年記念祭は終わりましたが今までに築き上げたポンポンCLUBの財産を地域の皆さんと一緒に有効活用して子供たちの夢を実現させたいものです。



▲オートバイ展



▲オートバイ走行披露

本田宗一郎伝記 読書感想文コンクール

ためす人になろう



光明小 三年二組

片桐 瑚波

本田宗一郎さんは、私が通う光明小学校に「ためす人になろう」というスローガンを送ってくれた人です。本田宗一郎さんは光明小学校の大先輩です。そして、せかいの「ホンダ」を作り上げた人です。学校にある「本田さん資料室」でオートバイや写真を見て、私は本田さんのことをもっと知りたくまりました。そこで、この「空とぶオートバイ」という本を読んでみようと思いました。

この本は、山間の小さな村に育った本田宗一郎さんが、やがて、世界一のオートバイを作り上げるまでのお話です。

本田宗一郎さんは、子どものころ、いたずら好きawanばんく少年だったようです。先生の授業のじゃまをしたり、校長室の金魚を「赤ぼっかりでつまらん」と言ったり、青、黄、むらさぎのエナメルで色を塗ったりしてしまいました。今、こんないたずらをする人はいません。

でも、いたずらばかりしていたのではなくて、精米機や自動車のエンジンにあこがれて、光明村から車で一時間もかかる浜松まで自転車をこいで飛行機を見に行くほどじかいが大好きな子どもでした。わたし

は、いくら見たくても光明から浜松まで自転車で行くなんて、すごいと驚きました。行ったこともない知らないところへ一人で何時間もかけて行ってしまっなんて、私にはできそうもありません。

この本で一番心に残ったのは、ピストンリングを作った時のことです。ピストンリングは「鋳物」という物で作ります。鋳物は簡単なものではなくて、二・三年修行をしないと作れないんだそうです。本田宗一郎さんは、夜遅くまで研究をつづけました。何度も失敗を繰り返して目標に向かって頑張りました。そして、学問の大切さを知って、浜松高工に通うことにしました。勉強をして新しいことに挑戦していききました。そういう努力が実ってやっと、ピストンリングが出来上がりました。油だらけになってくじけずにやったから成功したのです。

わたしは、この話を知って「ためす人」とは、本田宗一郎さんその人のことだと思いました。本田さんは、ためすことで自分の夢をかなえたのです。そして、私たちに「ためす人になろう」と伝えてくれました。

私は、本田さんの好きなことに夢中になっていく生き方を知って、願いをかなえるためには、何事にも負けないと頑張らなくては、いけないと感じました。あきらめないで出来るようにするには、どうしたらいいか勉強して、そして、ためさなければいけないと思えました。「ためす人」になりたいと思います。



▲自転車用補助エンジン

「私の手が語る」を読んで



二俣小 六年三組

竹井 夏流

ぼくは、オートバイに興味があります。そのオートバイを作り出した本田さんのことにも関心があつてこの本を読むことにしました。

本田さんのやり方で一番感心したのは、未来を知りたいという意思です。やはり、経営者として大事なことは、過去にとらわれずに絶えず先を見て、新しい考え方や商品などを産み出していくことが大切なんだと思います。

自分が「どういう大学を出た」とか「こんなことを勉強した」などにこだわっていると過去に押しつぶされて、そこから抜け出せなくなってしまうという考え方も共感しました。いくら良いことを知っていたり、いろんなことを学んでいたりしても、それを未来や自分の成長のために使うことができないと、それは無意味な存在になってしまうと思つたからです。自分が好きなことや得意なことを頑張って勉強し、知らないことは、その道の専門家や学者に聞いて、みんなで協力してやってみることも大事なこともなるとわかりました。そして、教わって知った、やって知ったという体験によって得た知識が、自分を未来へ進ませることに役立つということがわかり、これからは、僕も自分から進んで何事も実行して、多くのことに挑戦していきたいと思えました。

また、本田さんの自分に物事を教えてくれたり、アドバイスをくれたりする専門家や学者などの人たちに

対して、応える気持ちを忘れないこと、教えてあげてよかったと思うてもらうことは、自分の知らないことを教えてくれている人たちへの思いやりだということに気がつかされました。やはり、みんなが協力し合っていてやっていくためには、周りの人への思いやりが一番大切になってくると思いました。そうやって、やさしさや思いやりの精神で人とかがわりあって生きてきた本田さんだからこそ、「世界のホンダ」を築き上げることができたんだと思うし、ここまで発展させることができたのも、本田さんの絶えず先を見つめ、未来を知るといふ姿勢があったからこそだと思えました。

夢を追いかける

清電中三年一組



村井 萌乃

「物まねは嫌い。ユーモアと純情」私はこの本田宗一郎の言葉に目を引かれました。何物にもとらわれず、自分の描いた夢に向かいどんどん挑戦していく姿。堅苦しいだけの生活ではなく、人生を明るく楽しく保っていく姿。熱心に物作りをする姿。そんな本田宗一郎が頭に浮かんでくるようです。

いつ頃だったか、母に連れられ、本田宗一郎展を観に行った時、ふと一つの大きなパネルが私の目に飛び込んできました。そこには彼の手が描かれていました。その手には何十個もの傷があり、カッターやハンマーでできた傷、キリやバイトが突き抜けた跡。「満足なのは小指だけ、別に深い意味はない。」と、彼の言葉

にもあるように、本当に傷跡だらけでした。私は思わず息を飲みました。世界の本田と言われる人が、これ程までに傷だらけになり追い求めた夢。その傷から彼の苦勞と仕事にかける情熱に胸をうたれました。

本田宗一郎は明治三十九年、旧天竜市に生まれました。彼の父は鍛冶屋で宗一郎は幼い頃から物作りに親しんで生活してきました。彼が世界の本田といわれるまでに成長した原点はここにあるんだと、私は思います。彼の物作りへの熱心さはとても強く、家から遠く離れた場所にあるにもかかわらず、機械や車を見に行ったり、なんと二十キロも離れた所に自転車で行き行ったり、なんでも行ってました。よほど好きでなければ普通はそうではありませぬ。そんな物事に夢中になれる彼の姿はとても輝いていたと私は思います。自分を振り返ると、私にもこんなに夢中になれた事が、はたしてあったのでしょうか。一時期、のめりこみ熱中したものはあっても、彼のように人生の全てをかけるほど夢になったものは、きつくないと思います。あらためて本田宗一郎の偉大さを感じました。本田宗一郎は職人の腕はもちろんのこと人間的にもとても素晴らしい人です。そんな彼は、いくつかの言葉を残しています。「人間関係こそ一番大切、覚えるのはコンピュータで良い。」私はこの事は今の時代に大切なことだと思いました。記憶の優秀さも大切ですが、良好な人間関係が築けていれば、どんな情報や知識でも入ってきます。それだけで自分の知識が広がり成長できるということです。無理に全てを吸収しなくても、人間関係の中で少しずつ自分のためになることを知っていけばよいのだと思えました。そしてまた、人と接して初めて学び、心こもります。そういつた出

会いを大切にしなければいけないと思います。「悪い子に期待する」これも本田宗一郎の言葉です。彼は個性というものをとても大事にしています。なんでも親や周りの言いなりになる子や、大人の考え方の枠から飛躍しようとしないう子より、自分の意志を表明し、主張したり、個性的な行動を示す悪い子に期待しているという。なぜならば、そういう子どもたちこそ個性の芽生えを持つ、頼もしい、可能性に満ちた本当の意味での良い子だからです。型にはまって、何でも素直に受け入れてしまっていれば、そこから抜け出せず成長することができないし、得る物も少ないと思います。だから悪い子といわれるのを恐れず様々なことに挑戦して、多くの体験を通して成長していくのが大切なんだと思います。本田宗一郎は個性の大切さを小学生のときから感じていました。個性があるからこそ、新しいものを作り出すことができ、今の発展したホンダの会社があるんだと思います。

本田宗一郎はつねに夢を持ち、そのために努力をしてきました。彼の手がそれを物語っています。技術においても経営においても、創造力こそ力の源泉であり、創造力は見果てぬ夢から生まれる。夢を捨て、失敗を恐れるときに人間の創造力はしぼむ。本田宗一郎の生涯をたどり、あらためてそのことを痛感します。

最後に偉業を成し遂げた彼が、この天竜の地の出身者であるということを私達は誇りに思い、彼の夢を追いかける熱く強い精神力を見習い、今、自分の目の前にある事をしっかり見つめ、私は私自身の夢の実現に向けて、決して途中であきらめることなく、一歩一歩着実に成長していきたいと思えます。

本田宗一郎 ゆかりの地



■清瀧寺の鐘楼

二俣尋常高等小学校の高等科に在学していた時、学校のすぐ隣にある徳川家康の長男信康の菩提寺「清瀧寺」の正午を知らせる鐘を30分も早く打ち鳴らし、早弁をしたという。



■四十八瀬川と光明山

当時、現在地の南側を川幅40mほどの曲がりくねった四十八瀬川(現二俣川)が流れており、宗一郎少年たちは川遊びや釣りに興じた。また光明山も絶好の遊び場所であった。



■子どもの頃遊んだ大池

林道光明線の起点から少し入ったところにある灌漑用ため池。宗一郎は学校の裏山を登り、級友大隅久さん方のみかん畑を抜けて大池へと下り、ここで遊んだという。

■子どもの頃登った槇の木

宗一郎が通った山東尋常小学校の校庭にあった槇の木で、幼少年時代にこの木に登ってよく遊んだ。



■宗一郎が植えた柏の木

この柏の木は宗一郎が幼少の頃父儀平と夜店で苗を買ってきて、山東の自宅の庭に植えたもの。樹齢100年を数える柏は今もこの地に力強く生き続けている。



おわりに

本田顕彰会会報第三号の発行に際し、多数の方々より寄稿していただき、誠にありがとうございます。ございました。

この三号の特徴は、本田宗一郎生誕百年記念事業についての記事が満載です。

記念式典・遺品展・記念祭の三つの柱が、思う存分に発揮され、三つの分野が互いに特徴を作り出した結果が、皆様の笑顔と感嘆の声に包まれたものと思っています。出席者の熱き思いは同じで「これで終わってはもったいない。」「東京で公演したら・・・。」等今でも町の語り草となっています。

また、二〇〇六年十一月一日初版発行
水上一夫氏著書「打つ手無限」―私の本田宗一郎像―の中に、人生も仕事も打つ手は無限、この考えにつきます。

また進歩は、反省の厳しさに正比例するとの考えが書かれており、すべての行動の基本指針になっていると述べています。

これらの言葉を、今後に生かすべく努力したいものと思っています。

次号は「本田宗一郎記念ものづくり伝承館(仮称)」関係になると思われます。どうぞご協力をお願いいたします。

理事 鈴木 かづ子

本田宗一郎顕彰会の会員を募集しています。

世界のホンダを築いた郷土の偉人、本田宗一郎さんの出身地は、静岡県浜松市（旧天竜市）であります。宗一郎さんは明治39年11月17日（1906年）の生まれで、幼少のころから大変好奇心が強く、自分で見極め、確かめなければ気がすまないという、進取の気性と旺盛な研究心を持ち続けた方でした。その夢は、自分で製作した自動車で、全世界の自動車競走の覇者となることでした。この道一筋にかけた情熱と努力の成果の足跡は、自らの手に残されたたくさんの傷跡が物語っております。まさに、血と汗と涙の尊い努力のたまものと思います。

郷土浜松市（旧天竜市）をこよなく愛された宗一郎さんの人生の教訓・語録の中には「試す人になれ」「成功は99%の失敗に支えられた1%だ」などの名言があります。

明治・大正・昭和・平成の時代を果敢に生き抜かれ、世界を駆け巡った宗一郎さんは、84歳をもって天寿を全うされました。

このことを多くの人々に知っていただき、また、次の時代を担う子どもたちに大きな夢と希望を抱いてもらうために、その功績を広くアピールしていくことが残された私達の使命であると考えています。

宗一郎さんの数々の偉大な功績と不撓不屈の精神を後世に伝え、今後の「人づくり」「ふるさとづくり」に生かしていかなければならないと思います。

平成18年11月17日（2006）に、本田宗一郎さんの生誕100年を迎えました。

これを機に浜松市は本田宗一郎さんの業績をたたえる記念館（仮称）を建設します。

顕彰会といたしましては、この記念館を中心に本田宗一郎さんの人柄と輝かしい業績を顕彰するとともに、物づくりの精神を伝承する活動を推進してまいります。

そのためにできる限り多くの皆様方にご賛同を賜り、一層のご支援をお願いしたいと存じます。

本田宗一郎顕彰会

■目的について

顕彰会は、郷土の偉人本田宗一郎の精神と業績を顕彰し、恒久的にその業績を伝承することと、次の時代を担う青少年に夢を持ち続け、創造意欲を高揚することを目的とします。

■年会費について

個人会費 1口 2,000円
法人会費 1口 5,000円

■お申し込み方法

所定の申込用紙（振込取扱票）に必要な事項をご記入の上、最寄の郵便局又は下記の事務局に会費を添えてお申し込みください。

お問い合わせ先

**本田宗一郎
顕彰会事務局**

〒431-3314 静岡県浜松市二俣町二俣 501 番地
TEL・FAX 0539-25-6122

※4月1日以降は

〒431-3314 静岡県浜松市天竜区二俣町二俣 501 番地
TEL・FAX 053-925-6122 となります。

受章した勲章の一部紹介



■レオポルド二世勲章グラン・クロワ章
平成2年6月 ベルギー王国から受章。
([ユーロパリア89ジャパン]の功績から)



■勲一等旭日大綬章
平成3年8月28日 日本国から受章。
既に昭和56年 自動車産業の発展に
貢献または行政運営の円滑化に寄与した
ことを認められ、勲一等瑞宝章を受章。



■アメリカ自動車殿堂 (A.H.F.) 記念メダル
平成元年10月10日 アメリカ
日本人として初めての自動車殿堂入り
記念メダル。



「富士山」

富士山が大好きだった宗一郎が、初めて描いた忍野から見た富士山

本田宗一郎顕彰会

編集 理事 鈴木かづ子 事務局長 理事 鈴木益雄

〒431-3314 静岡県浜松市二俣町二俣 501 番地

TEL・FAX：0539-25-6122

501Futamata Futamata-cho Hamamatsu City Shizuoka Pref. Japan

E-mail：tenryukokusaihonda@sunny.ocn.ne.jp